同窓會員著圖書目錄

鍵谷　傳　學理經濟新式養蠶法（定價不詳）
東京京橋區本湊町一〇番大日本農業奬勵會

朝倉　昇　合理的全芽育蠶法（絶版）
上田市蠶絲雜誌社

唐澤正平　蠶兒の雌雄鑑別法（一圓二十錢）
上田市蠶絲雜誌社

濱井壽夫　バラ蠶種製造法（一圓五十錢）
上田市蠶絲雜誌社

同　人工孵化蠶種飼育法（三十錢）
上田市蠶絲雜誌社

鍵谷　傳　蠶業教科書、飼育、栽桑篇
京都市西ノ京御興岡町中島書院

同　施肥代半減桑園の肥料と綠肥法（一圓）
東京市神田區錦町一ノ一六　明文堂

同　蠶病から見た蠶の飼ひ方（一圓）
明文堂

同　環境から見た蠶の飼ひ方（一圓）
明文堂

同　飼料から見た蠶の飼ひ方（一圓）
明文堂

鍵谷　傳　通俗肥料から見た桑の栽培（一圓二十六錢）
京都市西ノ京御興岡町中島書院

蒲生俊興　夏秋蠶飼育の要義（五十錢）
東京市日本橋區駿河台町大日本蠶絲會

小野正男　實驗栽桑新論（一圓八十錢）
明文堂

猪坂直一　最新養蠶教本（二圓五十錢）
東京市　三養堂

猪坂直一
可兒良夫　編纂　蠶桑古典集成（六圓）
上田市坂井田町生絲の國社

沖濤治
大塚重藏　生絲檢査論（六圓）
東京下谷仲御徒町三丁目五十九　丸山舍

大塚重藏　蠶絲屑物と其精練法（二圓五十錢）
明文堂

新庄哲二郎　紬珍製絲法（學生叢書）（五十錢）
明文堂

長見公祐　世界人造絹絲工業（三圓五十錢）
明文堂

加美好男　最近人造絹絲工業概說（三圓五十錢）
明文堂

森山二郎　絹絲紡績（正三圓三十錢、續三圓七十錢）
東京市日本橋區通三丁目十五番地丸善株式會社

蒲生理事長の病氣

蒲生理事長は客年十一月二十三日開催の第二回代議員會直後遂に病を獲て就床せらるゝ身となつた、丁度あの當時背の眞中に腫物が出來、其爲か發熱して頭痛を覺え非常に倦怠を感じて居られたが二十三日から講演會の終る迄我慢して約一週日の間を無理押しに押し通して了つた、夫れでも腫物は講演會の終了を待つことが出來ずに手術されたが、それからくる疼痛も加はつて苦痛は甚しかつたらしい。

此等の無理が度重なつて、發熱は遂に風邪に風邪は遂に肋膜炎に變化し其の儘昭和三年の年末を病床の中に送らねばならなかつた。

越えて四年一月十日頃迄約四十日間と云ふものは熱は三十七度から八度の間を往來し所謂日歩長熱の形をなしかなり憂慮されたが十二三日から漸次快方に好轉して熱は降り初め極めて無事な經過を以つて三月の溫暖期に入り稍々平熱近くに服して了つた。

四月からは離床してボツボツ近所を散歩等さるゝやうになり夫れ以來今日に至る迄極く順調な經過を歩んで居るが何にしろ發熱期間が割合に長かつたために當分靜養を必要とし、醫師の奬めに任かせて校務から離れ專ら身心の安靜に力めて居られる。

此の間同窓各位から或は直接に或は間接に再々御懇切なる御慰問を受け其の御芳情には感謝に餘りある次第であつた。殊に長野縣在住の南北信支部の諸氏には特別なる御配慮を煩はした、此の場合謹しんで感謝の意を表する次第である。

尙又會務の處理に就いても充分な進行が出來なかつたが此の點も事情御愍察の上御宥恕を請ふ。

次に今後の狀態に就いて主治醫に聽くと此際徹底的に完全を期するためには猶ほ靜養を要するから校務を缺筆することを得るのは本年度三學期か又は來春であろうと言はれて居る。

又　吾々も極力大事をとつて病くわの根柢を剪除する迄安靜を御奬めして居るから晩くとも來春には齳に倍し元氣潑溂たる理事長を迎へることが出來ると今より期待して居る。

同期生雜誌の發刊

此頃　同期生のみを誌友とするユーモアな雜誌が上手に編輯されスマートな姿を會員の前へ顯はす、其の印刷は頗る風雅であり体裁は甚だ端麗であり克く纒りがついて居て家族的であるから非常に親しみ易い感じがする隨分忌憚のない意見と勝手な熱を吹いて談論風發縱橫無盡に餘太を飛ばして居る光景は全く學生時代の再來である。今筆者の手にしたもの四册を御紹介すると

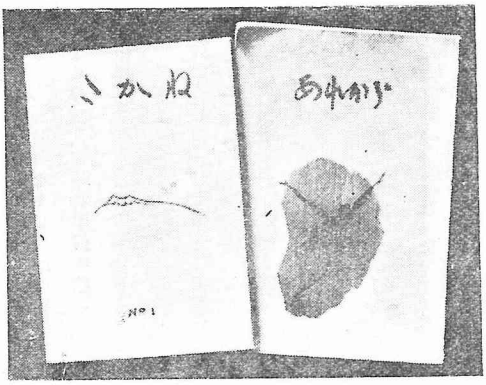
「あれから」　第三號　編輯者　芝　荒雄氏（三回）

「このごろ」　第二號　同　尾見祐八氏（五回）

「たかね」No. 1　同　今村良郷氏（十三回）
「ぼしん」創刊號　同　小林貫一氏（十五回）

但し編輯者ははつきり判らないが上記の人であろうと想像する此の雜誌の本家も何れだか知らないが「あれから」は已に三回號を重ねてゐるから之が長兄かも知れない。此等の内容を一々書いても面白いものであるが誌面が許されないから一括して敬意を表することにする。

印刷所は「このごろ」を除いて全部三册とも名古屋市東區大曾根町八幡前未來社であるから裝幀、製本みな一樣である。



次に表紙の意匠は「たかね」と「ぼしん」とは何れも學校にゆかり深い思ひ出の種を表はしてゐる「たかね」の表紙をデザインした野口氏は其の歌に於いてかく云ふてゐる。

――光輝ある希望の明星、吾等の行方を照らす……三年の星霜を日夜あほぎし鳥帽子の高嶺、人生に對する純情を示す雪……。四月の殘雪のスノーラインは今も吾等の胸に生く――……と

表紙には鳥帽子のスノーラインを配し扉にはクロユリを鏤ばめ雨つとも清洒としていやみなく一點非のうち所が無い、若き詩人野口氏の心に活きた高原の第一印象の姿其の儘が寫し出されてゐる。

「ぼしん」は編輯も意匠も悉く貫ちやんの手になつたもので其のいはれを次の如く歌つてゐる。

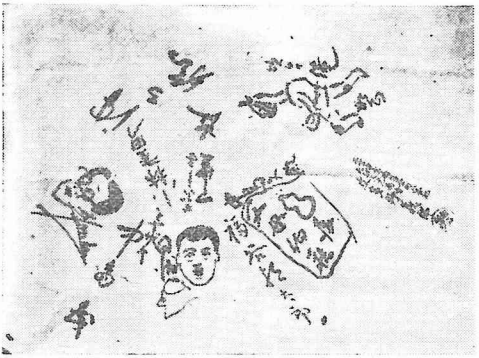
星の數を數へて御覽下さい。二十九個がキンギンギラ〳〵光つてゐますそのをちこちの星こそ我々のクラスメートなのです星！星を見つめつゝ端座した時――必ず内心囁く何物かがあります――それは神靈の聲です…即ち誠である……。

白皚々たるは太郎山です、清き流れは千曲川です煙突、サイレン、ポプラ、それ等は忘れ得ざる印象である。

此の意匠に向つては美術的な！眞に美術的な！と最大級の贊辭を呈するわけにはいかないが貫ちやんの誠實のひらめきは一見ビタツと胸に響くものがある、扉にも、會員よ！何とか叫べ！と大聲疾呼廿九の誠實な星に地の精が呼びかけてゐる、誠實はよく天地を貫くであろう。

「このごろ」は印刷所の後藤氏と編輯者尾見氏が巧妙な健筆をふるつて表紙に、扉に、カットに獨特の彩管をふるつて居る。

次に內容に就ていさゝか批評を下せば時代相は爭はれないもので明治時代の敎育をうけた人と昭和聖代の新らしい空氣を吸ふた人との間には自らなる差異があつて、結構、思想等夫々の特色をなしてゐる、赤い血潮を比色計で測つて見ても年と共に點數の差異をなすのも當然であろう。「このごろ」は主人の言葉にはあきが來たと見えて眞節なる糟糠の妻女が虹の如き氣焰を上げてお勝手の內容を披瀝して居る所も却々に面白い味がある、



史汀が「あれから」の卷頭を飾る言葉を引照しやう。

卷頭言

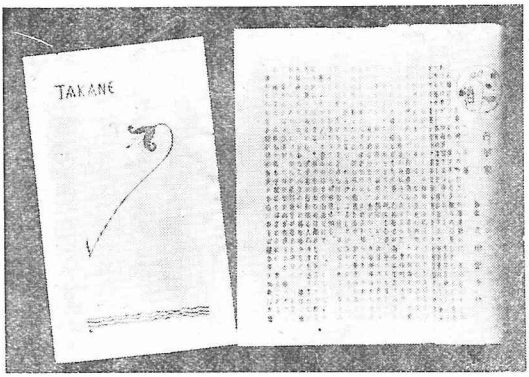
電車に石を拋つてたのしんでゐる子供があつた。

車掌がつかまへて「なぜ石を拋るのだ」と叱つたところが「私は玩具が買つて貰へないから、石を拋つてたのしむのです」と答へた。

今迄怒に光つた車掌の眼には涙が一杯浮んだ、そして子供の顏をじつと眺め頭を撫でゝ去つた。

……

あれから社同人には玩具を買ふ金がない、と云ふて石を投げてたのしむ純眞さを有たぬ、よしんそばの持ち合せがあつたにしても四十に近い此の年では四圍がそれを許してくれぬ。といつて心の糧なしには生きて行かれぬ。



こんなことから生れたのが「あれから」だ。……と各クラスを一層として十七レイヤー全部橫斷的に如斯き雜誌の生れ出ることを切望して止まない、吾等が同窓會雜誌は是を縱斷的に出刺し何れのレイヤーにも共通的な使命を負ふたものとしたい、かくして初めて經緯全會員を覆ふ

有機的組織が構成せらるゝのである。乍然　かく同期雜誌が豊富な内容を以つて發刊されるにかゝわらず、本會報に寄稿を忘れて居るのは如何ゆふわけか！吾等も驚を大にして連呼する、全會員よ！、何とか叫べ！と、次號に果して反響あり哉否哉――寫眞は此等の雜誌を寫し出したものである。

會員の訃

（會員の御逝去に就いては同期生又は昵近者から屢々前後の狀態等の御質問を受けます、之からは差支へ無い範圍に於て判明した事情を御報告し相共に悲しみを分かちたいと思ひます）

佐藤達氏（鑑九）　昭和四年五月廿六日

――小泉清明氏から本校校長に寄せられた通信に詳はしく書いてありますから全文を載せることゝ致します――

台灣に於ける唯一の同窓佐藤道氏御逝去の御報告をせなければならない不幸に立至りました。私達台後間もなく四月二十日頃から假初の風邪氣味の病氣が却々快方に向はず遂に二十六日台北赤十字病院にて長逝されました（中略）台灣總督府屬だつた同氏は生前近々のうちに事務官に榮進し高等官に任ぜられる豫定のよしでありましたが、五月二十七日生前の望み達つせられて任官せられたことなども今は悲しき思ひ出となりました。殊に身軍の御夫人といたいけ無き三才の坊ちゃん等を考へると暗然として泪無きを得ません。

葬儀は本日台北日本基督教會に於て總督府關係其他の會葬者非常な多數の來會者を以て盛大に行はれました。

同氏は享年三十二才、生氣充滿前途洋々たる青年紳士にして督府豊田内務局長官の信任厚く將來を非常に嘱望されて居りましたが實に殘念でした。私も台灣にて唯一人の語るべき友を失ひました。（下略）

平野定雄氏（紡五）　昭和四年四月四日

クラスの人氣ものであつた君は卒業後直ちに鄉里の菊井紡織會社に奉職せられた。然し健康が許さなかつたので間もなく辭し岡崎工業學校に轉職せられたが亦々病魔の襲ふ所となり專心保養に盡されたがその効もなかつたのであろうか遂四月四日逝去すとの報告に接した。明るい氣分の人だけに尙存命の樣な氣がしてならない。

田子英人氏（紡三）　昭和四年一月二十日

君は布内城下の出身で丸子町信濃絹絲紡績會社に奉職し辛棒强く孜々として忠實に努力せられた會社に効顯する所あつた

がやはり健康を損ぜられた爲め一先ず辭し改めて別の進路を辿るべく御奔走中の處近々輕い風邪から次第に病重り遂に一月十九日逝去せらるるに至つた、同君は人一倍友情厚く一般から敬愛せられてゐた人だけに殊更愛惜の情に堪えない。

雜賀喜久三氏（鑑五）　昭和三年十月十日

――このごろへ執筆されたしづ枝未亡人の手紙の一齣を轉載します――

（前略）早くよき醫師の許にて最良なる療養がよからんと神戸市外須磨浦療病院へ追ひやる樣に慌しく入院しましたがそれが私達には此の世での最後の生活でございました。入院後日增に全快の域に達しも早此の日には退院の喜びをも見んとする時秋冷の或朝風邪心地の身が急性の肺炎と變じ家族一同馳せ付けし時はも早や只々人の見さかひ位にて僅々二三日の病床にて私共子供を連れに行く半途と云ふに空しく引き返したる次第で御座います。

……之は樋口未亡人に宛てた手紙の一齣です……

影浦　年　丸氏（鑑五）　昭和四年二月九日

急に亡くなられたやうであります矢張り「このごろ」に樋口氏の死をいたみ「慟哭悲泣」と題して次の手紙を送られたのを不幸にも復同氏に移し植て悲しまなければならない運命とは天帝の攝理の無情を泣かざるを得ません。

……樋口君の死は際限り泣いても尙足らない事であります御遺族の皆樣の御心持をお察し致しますれば到底言語に盡されない悲しみであります……。

井川　清氏（絲十）　昭和三年十二月十一日

小山健次郎氏（絲二）　不明